人生の目的

94
591

94-5

目次

緒言

本論

第一章　佛教己外に於ける人生目的觀の梗概を示す

第二章　佛教に說ける人生の目的は如何なる者なるやを論す

第三章　證文を擧けて佛教の人生目的は清淨說にあることを結す

餘論

明治
41 11 2
印度

人生の目的

高倉大學寮教授　廣陵了賢口演

緒言

人生凡百の業務は、政治も教育も宗教も戰爭も皆以て人類最終の目的を達せんか爲めの一方便たるに過きず、故に我等は或る目的の爲に活動しつゝ有る者なりと云を憚らさるなり、是以て社會最要の急務

は、自己人類の目的を一定し、之に到達するの方法に於て最も便利なる者を攻究撰擇するにあり、然るに世人の多くは未た自己最終の目的を攻究せんとする思慮に乏しきのみならす、他に依て其教を受けんとするの觀念もなし（所謂醉生夢死の徒にして唯無意識に社會に生存しつゝ有る者の如し、之を例るに其家の小僮主用を以て他に使ひせんとする時、その行くへき先方の町名番地屋號を問はす、又其用事の如何をも聞かすして足に任せて或る方角へ疾走せし

と云ふ御伽噺しこ其趣を一にす、誰か之を常識ある者の行爲とするを得んや、然るに社會人の多數か人生の行路に於て彼の常識を缺ける某家の小僮を學ひつゝ有るは實に遺憾に堪へさるなり、故に我々佛教徒は、佛陀世尊の教示し給ふ三世一貫の大目的を研究討尋して自信を固むるは勿論、他にも勸誘して共に缺陷なき人生の行程を進まんと欲し、爰に此の標題を掲げて一言を試みすと欲する所なり

本論

第壹章　佛教已外に於ける人生目的觀の梗概を示す

人生の目的を論ずることは獨り佛教に限らず、古來の學者宗教者皆之れを論し各獨特の說を立つ、今佛教に說ける人生の目的を論せんとするに先ち他の諸家の說を擧け示すことは、所謂他山の石以て錯を爲すへしの微意に外ならす、諸君之れを諒せよ

古來の諸大家か人生の目的を論せしものを集め、

之を大別すれは左の二說となる

(甲)一定の目的は無きものと信す

(乙)一定の目的は必す有るものと信す

此の兩說各分れて多種となれり(甲)は四說に分れ(乙)は十六說の分岐をなせり、已下に於て之を畧示す

(甲)說の種別は左の如し

(甲)一定の目的は無しとする說に二を分つ

「一に萬有の自然に任すの說、此れに二あり

「一に時空に約するの說……第一說

「二に智力に約するの説……第二説
「二に目的は變動すへしの説、此れに二あり
「一に事情に依て變するの説……第三説
「二に變遷の理に伴なふの説……第四説

右の四説に就て其要とする所を論せは、兩重の主客兩觀を以て四説の別を知るへし、其第一重は初に客觀たる萬有に就て萬有は自然なりと云を根抵とし て第一、第二、の兩説を立て、次に主觀たる自身に就て我等は變遷すると云を基礎として第三、第四、の兩説を設けたるものなり、第二重は之に又二個の主客兩觀ありて、一に萬有は自然なりと云ふ下に就て客觀より云へは萬有は無邊なり無盡なりと云ふにより て立てたるか第一説にして、主觀より云へは萬有に對する智識は有限なりと云を本として論するか第二説なり、二に我等は變遷するものなりと云ふ下に就て主觀たる自己の事情に依るとするか第三説にして、自己の變遷は社會の變遷に從ふものなりと客觀的に變遷を説くか第四説なり、已下に於て四説の

梗概を述ふへし

第一説は、凡そ人類の社會に在るや其生するも天地自然の規則に隨ひ死するも亦其規則に順ふ、豈に獨り我々人類のみならす禽獸草木より無機の物體に至るまて皆然らさるなし、故に若し人類にして必す一定の目的ある者と云は、草木にも土石にも必す一定の目的ありと云はさる可らす、果して然らは此を知るは如何なる方法に依りて知るを得るや、試みに思へ此の無邊無盡期にして際涯なき大宇宙に向て我

等人類を比すれは百年の生命、五尺の身體、實に一瞬一埃の微物にして更に論するの價値をも有せさるものなり、然れは斯の如き最小最短の微物たる我々人類か、大宇宙の全體に通して一定不變の目的を無盡期の將來に向て求めんとするは、甚た笑ふ可きの至りにして畢竟我々の迷夢たるに過きす、故に我等は萬有自然の法則に隨ふて他動的に人生を終ふるの外なし、何を苦しんて人生の目的を一定するの要あらんやと云ふか、時空に約して無目的を主張する論

者の說なり

第二說は、我等人類の知識は有限なる者にして、目前現在の事物を知るの能力あるも、宇宙の全體、心靈の妙用、或は萬物の原始、世界の盡期等の問題に至ては我々の智力を以て一定し得へからす、然らは斯の如き有限の知識を以て焉くんそ永遠の大目的を知るを得んや、假令人生の目的なるもの自然的に存するにもせよ、我等の智力を以て之を究むることは到底不可能のことなりと論するか智力に約する論者の說なり

第三說は、凡そ人類の一般に通し現在及ひ未來の長時間に亘りて一定不變の目的なる者あるへき理なし、我等人類は活動し進步するの性を有す、故に其地位、境遇、長幼、賢愚、等の各自の事情に依りて其期する所の目的は變遷異動する者なり、之を再言せは吾人の目的とする所は時々刻々に內外の事情に依て變遷する者にして、決して事情已外に別に一定の目的なる者有ることなし、之を從來の經驗に徵す

るに、或る時期は甲を目的と定め、非甲を目的に非すとせしも、其時期を終る時は、却て非甲を目的として甲を目的とせさる事あり、是れ一定の目的なき證左なり、依て知る、吾人は其遭遇せる狀態の如何に應して一時的の目的は有るに似たるも、永遠に亘る一定不變の目的は無きものなりと云ふか事情に依て變するか故に一定の目的は無しと云論者の說なり

第四說の論者は、社會の變遷より之を考ふるに、萬有は總して變化遷轉して暫くも休止せす、然れは

其間に介在する我々人類のみ變遷の理に違するを得す、已に然りとせは人類の目的なる者も亦社會の變遷と共に轉化して昨日の目的は今日の目的に非す、又今日の目的は必すしも明日の目的とするを得さるへしと云ふか、萬物變遷の理に伴ふ說を主唱する論者の議論なり

(乙)說の種別は左の如し

(乙)一定の目的は必す有りとする說に就て、二を分つ

(イ)目的は有るへきも其目的物を示し得さる說此に四あり

一に義務に依て目的の有るを知るの説…第一説
二に經驗に依て目的の有るを知るの説、此に二あり
一に時間に約するの説……第二説
二に知識に約するの説……第三説
三に無目的を以て目的とするの説……第四説
四に變遷進化を目的とするの説……第五説

乙の一定の目的は必す有るへしと云ふ説に就て（イ）（ロ）の二大別を爲し、其中（イ）の一定の目的は必す有るへきも此れそと指し示すことは不可能なりと云ふ説

に四説を分ち、其中の第二説に就て更に二説を分つ故に説の種類を數へ來る時は五説の別を成すなり

巳下に於て五説の梗概を述ふへし

然るに今五説の梗概を述るに先ち一言せさるへからさるは甲説の目的無しと云ふと、乙説の有りと云ふとの議論の基礎なり、此の兩説の分るゝ所は左の論點にあり

一甲説は人智巳外に固定の目的なる者を求めんと欲するか故に遂に不可能に終る

二乙説は人智已内に人の能く知り得へき目的の有るへきは必然なり、假令ひ自然的の目的は無しとするも我等か世に處するに當て實際上何か目的を定めさるへからさるは事實なり、故に一定の目的ありと斷定して其れに向て種々の説を講し、其最も便利なる者を撰はんと期するか乙説論者の精神なるか如し

又乙説の中に於けるイ）ロの二説は、イは一定の目的は必す有るへしの理を論する者にして、ロは何々を以て目的と爲すと云ふ目的明示説なり、故にイを（ロ）の前提として研究し置くの必要ありと存するなり

（イ）の第一説は、吾人は盡すへき義務あるより考ふれは必す目的は有るへしと推知するを得るなり、其故は若し人にして必す果すへき一定の目的なくんは人々其思ふ所に任せ其欲する所に從ひ自由勝手にして法律又は德義の制裁あるへき理なし、然則吾人に於て所謂義務・責任、天職、等の守るへき必要なし然るに已に義務の盡すへきあり、責任の重んすへき

あり、天職の守るべきあり、是れ卽ち其の達すべき目的ある反證なり、已に堤防ありて水の汎濫を許さず、是れ必す一定の河口へ灌かしめんか爲めなることを推て知るべきなりと推論する說なり

（イ）の第二說及ひ第三說は古來の經驗に依て考ふるに、人の目的と定むるもの時に應して變遷することあるも、其の歸する所の極致は古今一定して二途あるなし、併し之を說明するに二の方面あり

一には、時間に約する說明、古代より今日に至る

人類社會に於て其行爲を一定せるより見れは察すゝに一定の目的ありて次第に進行し來れる者の如し、去れは今日より將來に向ふても亦過去に於けると同しく其目的に向て同一歩行を取るへき理なり、（第二說）

二には、知識に約する說明　人の知識は限りあり故に大宇宙に通したる固定の目的は知る可らすと雖も、其の知識已内に於て自然に目的とせさる可らさる者あることは既往に徵して知るを

得へし、之れ知識上の經驗に依て有りと知ること云ふ說なり、（第三說）

（イ）の第四說は有限の知識を以て無限の大宇宙を測定し無盡の時間に向て最終を論せんこと容易の業に非す、又社會の變遷常なきを觀し來れは一定の目的ありと信し難し、故に一定の目的なしと云ふを以て目的と定め臨機の目的を達することを努むへし、之れ無目的を目的として處世の變に應せんとする說なり

（イ）の第五說は人の目的とする所は社會と共に變遷進化して一日も休止せさる者なり、去れは吾人の目的とする所ろは其變遷進化を以て目的と定むるの外なしと云ふ說なり

以上は目的はあるへしと信しつゝも其の物體は何々てあると明示し得すと云ふ諸說の種類を五說として略示せしなり

（ロ）目的物を明示し得る說に就て二を分つ

（ハ）非幸福を目的とする說、此三にあり

一に知識を以て目的と爲す說　此に二を分つ

一に知識を完ふするの說　(1)瑣克剌底氏の說

二に理想を達するの說　(2)弗拉的氏の說

二に德行を以て目的と爲す說　此に三を分つ

一に妄念を離脫するを目的と爲す說　(3)犬儒學派の說

二に至善に止まるを以て目的と爲す說　(4)儒敎、大學の說

三に良心に順ふを以て目的と爲す說　(5)「バトラ」「リード」「スチワルド」等諸氏の說

三に正理を以て目的と爲す說　此に又三を分つ

一に天命に任する說　(6)士多亞學派の說

二に自然に歸する說　(7)老子及莊子の說

三に道理に順ふの說　(8)「コッドウオルス」「クラーク」「プライス」氏等諸氏の說

已上は非幸福を目的とする諸說の類別なり斯の如く數へ來れは都合八說の別あり、尙此の外に佛敎、耶蘇敎、神道、の目的說をも別種の非幸福說として之れを此等の諸說中に加へて說明する者あれとも、

今は之を除外こし後ちに別に之を畧示すへし、然るに爰に一言を加へ置くへきは、上陳の非幸福論者は凡そ幸福なる者は目的こ成す能はさるものなりこして、五個の理由を擧けたり、左に之を抽記す

一に幸福は各人一定せさること

二に幸福は經驗の結果に過きさること

三に幸福は義解を下す甚た難きこと

四に幸福の多寡良惡を算定し得さること

五に心理上に於て苦樂は同種なるか如し故に過こ

不及こを苦こし中庸を樂こ感するに止る然れは苦を去りて純全の樂を得んことは不可能にして架空の妄想に過きさること

斯の如く種々の批難を擧て幸福說を排し非幸福說を立る者、數家ありこ雖も之を要するに二種に過きす、一は全く幸福說の反對を取る者、一は幸福の一部分を許す者なり、卽ち前者は全く人生の快樂幸福を捨てゝ己か所信の道を求むる者にして所謂犬儒學派の如き是れなり(備考、犬儒こは原語に「キニック」こ云ひ、此派の教旨こ

「アンチイステチース」と云ふ、此の名稱の由來は、此派は無神論學派なるゆへ有神論者より神を蔑する者は犬の如し、靈心内に主なきものは犬と闇はずと云ふ誹謗の意味より名けたるものゝ如し）、後者は諸の善行の完備したる者は自ら幸福は得らるへきも幸福を目的として得んと求るは大に非なり、德義正善は人の目的にして之に向て進む時は其結果として幸福は自ら得らるゝ者なりとす非幸福論者の多くは大低此の後者に屬す、然れども此の兩説共に一種の空想に過きす、其故は實際に就て廣く世人の爲しつゝある所を見るに一として、幸

福快樂の方向に近かつかんことを求めさるなし、去れは非幸福説の如きは理論としては可なるやも知らされとも、實際には人情に背馳する議論なりと知るへし

（B）幸福を以て目的とする説に就て、二を分つ

一に偏愛幸福説　此に二あり

一に自愛幸福説　「ホッブス」氏の説（支那の揚朱の説之に屬す）

二に愛他幸福説　孔、孟、の敎之に屬す

但し孔孟は自修德行の義務として愛他説を爲す

者なり人生目的として說くに非さるか如し

非幸福說の第二の第二項を參看せよ

「ベンサム」氏、彌爾氏、倍困、氏、斯賓撒氏等諸氏の說、支那の墨子も此の說を爲せり

二に兼愛幸福說

上述の幸福說を主唱せしは、希臘の英彼古羅氏を初祖とし次に有りては洛克、富謨の兩氏あり、其後ち『ベンサム』氏は此の說を潤飾改良して功利教を唱ふるに至る（備考功とは愛他の結果を云ひ利とは自愛の都稱なり）世に實利主義と唱ふる者是なり、彌爾父子之を傳へ降りて倍困、賓撒斯、等の諸氏も自愛と愛他との二者を結合

調和する者を以て目的とせさる可らさる所以を論せり

爰に一言せさる可らさるは上に出せし非幸福論者の幸福を目的とする能はすと云ふに就て五個の理由を擧けたるに對し辨明せさる可らす、今五個の論點に就て一々に之を辨明するの繁を去り其要を取て之を云はゝ、非幸福論者の云ふか如く人の幸福とする所は各人に於て異なり時に依て不同あるは事實なりと雖も、人類の幸福とする所ろ決して反對なる者あ

ることなし、故に多少の相違點はあるにもせよ自然に一定せる者の如し、例へは富貴、長壽、等は人の一般に幸福とする所ろにして、貧賤、短命、等は人の一般に不幸とする所なるか如し、然れは人は其の自然の勢に任せつゝあるも、苦を避け樂に就き禍害を遁れ幸福を求むるの性を有する故に其の快樂幸福の最上善良なる者を擇て以て目的と定め、總ての人類を導きて其の最上善良の幸福を得せしめんとするは決して不可なる事に非さるへし、去れは目的論としては非幸福論を主張せんよりは幸福論を唱ふる方更に一歩を進めたる論なりと云ふへし、而して其幸福論中にありても、人類としては最後の兼愛說最も勝れたるか如し、然るに此の兼愛說に就て左の三個の疑問あり

一に一方に利ある者は必す他方に害あるを免れさる事

二に衆人共に最上の幸福を得る時は幸福轉して不幸となり不便を感することある事

三に幸福は生存を助け繁榮をなす者なれは其結果或は自他共に困難を感することある事

此の三問に答ふるには頗る多辨を要すへきことなれとも、勉めて簡短に之を説明せは凡そ物は比較に依て其意を達することあり、例へは十人中に五人は幸福を得るも他の五人は不幸に苦しむと云ふ場合に於て、或る方法に依り七人へまて幸福を得しめたりとすれは、不幸の量を減して幸福の量を増加したる者なれは、即ち幸福を増進せりと云ふを得へし、故に幸福の量を大にして受くる所の人を多からしむる時は幸福増進するか故に、或る地點にまて目的を達したりと云を得へし、去れは兼愛幸福説をなす論者は最上等の幸福を最多量に最多數の人に與ふるを以て目的とする者なりと知れは、總ての疑問は消滅に歸すると知るへし

巳上は諸家の人生の目的説を類別列記したるに過きす、我か正に論せんとする所ろは次章に於てすへし

第二章　佛教に說ける人生の目的は如何なる者なりやを論す

本章に於ては正しく佛教中に說ける人生の目的說を述へんと欲するなり、それに就て說明の順序を左の三段に分つ

一に萬有自然の目的を示し

二に人類最終の目的を論し

三に佛教所說の目的を述す

先つ初に萬有自然の目的を示すに就て、第一に起るべき疑問は萬有は皆其目的を一にするや否やの論なり、今之に答へて左の如く云はんとす

宇宙に彌滿せる萬有、其數實に恒沙雷ならすと雖も、要を取て之を類別すれは大に分て二つ、曰く有機物、曰く無機物なり、初の有機物の中又分れて二つ曰く動物、曰く植物なり斯の如く分類する時は萬有の種類は實に左の如し

一切萬有は皆此の三類に攝り盡く

- 有機物
  - 動物……
  - 植物……
- 無機物……

然るに此の三類皆同一の目的を有するやと云ふに決して然らず、三類の目的は實に左の如し

- 有機物
  - 動物……自由を目的とす
  - 植物……繁榮を目的とす
- 無機物……純結を目的とす

此の三類の目的は實に自然的のものなり、如何なる下等動物と雖も自己の自由を得んと欲することは明瞭なる事實なり、又植物は自然的に繁榮增殖を目的とし居ることは楓の實に瓣ありて風を逐ふて飛散し自ら繁殖するか如き、又鳳仙花の實は其熟期に至れは竪に開き横に外面へ卷きて種子を撥飛すか如き皆其の目的を自ら達せんか爲なり、又無機の鑛物の如きは同種同質の物と結合して鑛脉を造るより見れは他の粗雜なる物を排して同質の純結を目的とし期し居るもの丶如し、去れは萬有自然の目的なるもの

は姑らく此の自由と繁榮と純結との三種を假定して次段の說明に移るへし

二に人類最終の目的を論するに就て說明せさる可らさるは、世人常に云ふか如く人は萬物の靈長なりと、去れは靈長と云ふと雖も矢張萬物中の一物なることを免れす、況や人は動物の發達せし者にして動物は人の遠祖なり原人なりと云ふ論者さへ有るに非すや、然れは萬有に於ける自然的目的は人類に於ても同しく自然的目的と成るを得へし、人類獨り特別の目的を持てる理なかるへしと云ふ論あり、故に萬物の靈長たる人類と靈長に非さる萬有との別を見るさ見さるさに於て神道、佛教、耶教、の人類に教ゑる目的に別あるか如し、今試に三教の目的を示さは左の如き歟

耶蘇教　自由を目的とす——動物性目的
神道教　繁榮を目的とす——植物性目的
佛陀教　清淨を目的とす——鑛物性に似たる如し

右三教の目的を示す中前の二教に對する判斷は小

衲か推測に外ならすと雖も所謂當らすと雖も遠からさるの類なるへし、其故は耶蘇教に有りては神に依て自由を得ることを祈り、又神は全能全智なる自由の本體なりと論するか故なり、次に神道の聖典中には子孫の繁昌・家運の繁榮、又人を貴みて神と崇め其の神に彌榮へに榮へませと云ふ類の言葉甚た多し故に榮へる事を理想とする教へなれは繁榮を目的とする歟と推斷を下せしなり

さて佛教は清淨を目的とすると云ふことは下に至て經文を引きて説明すへしと雖も、此に論すへきは上に云ふ人類の目的と萬有の目的との同異の件なり是に於て小衲は云はんとす靈長たる人類と非靈長たる萬物とは同一視すへからす已に靈長と云ふに非すや、去れは萬有を三類に分ちたる一類に限らす三類に通したる特長の目的無くんはある可らす故に今其の所以を説明すへし

已に上に於て萬有を三類に分ち、それに對して三種の目的を出せしは或る一説に依て之を云ふものに

して、萬有に對する分類說は此の一に限らす種々の分類法あり、所謂固、液、氣、の三體說、又は物、心、二元說等なり、併し三體說は唯物に偏して盡さゞる所あり、故に二元說に依て萬有を論する時は前陳の二機說も又三體說も皆攝し盡すを得るなり、而して此の二元說に依る時は二元の自然的目的は共に清淨透明、清淨潔白にあり其故は凡そ物質として論する時は動物も植物も鑛物も皆同一種にして、其終極を討尋すれは悉く清淨透明に至る者の如し、曾て之を聞く世に人身の化して石の如くに成り、其幾分は半透明に成り、居る者ありしと云ふことを、又蟲魚にして化石となり半透明に成りたるものあることは小祢も實見せし事あり、其外植物の化石は世人の多く知る所ろ、已に石と成りし已上は無機物にして彼の純結を目的とする者となる、而して純結は終に清淨と爲るものなれは上に出せし動、植、鑛、の三類も物質として其自然性の目的を推測する時は清淨を目的とする者なりと云ふを得へし、次に二元說の

心なる者も慥かに清淨を目的とすることを知るを得るなり、其故は清淨は闇黑の反對なり、闇黑は心の溷濁なり、佛教には之を染汚と云ひ煩惱と云ふ、卽ち良心に反對せる不良行爲及ひ不良思想なり、此の溷濁なる不良行爲及ひ不良思想を除去する時は心に疚しき所なきを以て精神安適なり、之れ闇黑を去り清淨なるを得れは、心界に於ける自然性の目的に隨應するが故なり、去れは物心二元共に最終の目的は自然的に清淨にあることは爭ふ可らさる事實なり、

但し二元の目的共に清淨にありと云ふと雖も其性質は二元に於て同しからす、今之を命名して左の如く云はんとす

一に、物界の目的たる清淨は無靈清淨なり

二に、心界の目的たる清淨は靈妙清淨なり

右の如く萬有總ての最終目的は何れも清淨にありと了知し、而して物心の二界に就ては無靈と靈妙との別ありとして前の二機三類說と對照する時は、彼れの三個の目的は尙ほ最終の目的に達する徑路にし

て終極のものと爲すを得す、故に之を部分的目的と云ふ、二元説の目的を之に對して具體的目的又は最終の目的と云ふへきなり、併し動物と人類との目的に就て其別如何と云はゝ、靈妙の度に於ける進化の始終と云ふの外なし、最終に至れは共に一致に歸するものなり去れと非靈長は靈長の地位を經されは其最終點に達し能はさることを知るへきなり

然るに此に注意すへきは全體的目的と部分的目的なり、全體的は部分的を網羅するを得れとも部分的

は全體的を該括するを得す、故に前に出せる自由、繁榮、純結、の三類の部分的目的は清淨と云ふ全體的目的の範圍内に網羅せられて清淨なる自由、清淨なる繁榮、清淨なる純結を得るにありと云ふを得るなり、去れは靈長たる人類は若し人生と云ふ一部分に就て云はゝ彼の三類の部分的目的に通して其の三清淨を期する生活を目的とし、若し最終の目的卽ち全體的に人類の目的を云はゝ、靈妙清淨を目的とする者なりと云ふことを得るなり

三に佛教所說の目的を述んとするに就て一言すへきことあり、凡そ萬物に通して最後の結果なる者は溷濁を去りて純潔なる者凝聚結晶して遂に透明清淨となる者なり、例へは純炭素の結晶して透明清淨となりたる者は卽ち金剛石にして非常の光彩を放ち世界第一の貴重品として無上の寶と稱せらる、今心靈界に於ても之に類することあり、諸の心界の溷濁たる煩惱心を除去し無私清淨なる地位に至り、其最も極點に達したる清淨心を體得したるを佛陀と稱し、

宇宙最上の寶となし、或は無上尊と云ひ、或は佛寶と云ふ、去れは物界も心界も最終の結果を清淨とし清淨に達したるものを寶とすることは互に相ひ一致するか如し

然るに此の結晶清淨の果に到達するに就て三類の別あり、一に自然の結晶清淨、二に人爲の結晶清淨三に藥力の結晶清淨なり、此の中自然說は宇宙全體に於ける天則にして萬有の終極は必す自然の結晶清淨に有りと信するの外なし、彼の「テニソン」氏

か所謂萬世を通して一の大目的の走るあるを我は疑はすと云ふ、大目的とは卽ち此の淸淨をそれと知らぬ乍らも其の幾分を見認め居る者と小神は察するなり、併し此の自然は無意識的なるを以て論するの限りに非す、第二の人爲と第三の藥力とは結晶淸淨の目的を達するに就ての行程に於ける方法行爲なれは之を比較して孰れか最も目的を達するに於て便利なるやを論するの餘地あり、今之を佛教の目的卽ち靈妙淸淨に就て此の二種の方法に依て說明を殊にする

ことを論せん

抑も佛教に就て其內容を論すれは一種一樣に非す大乘あり、小乘あり、又大乘の中に於て、始教あり終教あり、終教の中に又聖道門、淨土門の別ありて其談する所ろ各別なり、然れとも之を實踐する所謂修行に就ては大に分ちて二となる、卽ち自力教と他力教となり淨土門を他力教として其他を總稱して自力教とするなり、而して此の二は上に論する人爲の結晶淸淨と藥力の結晶淸淨に似たる所ろあり、卽ち

自力教の方は自ら修行して自性清淨心を開覺する立かたなる故に、人爲を以て結晶清淨の目的を達するか如く思はれ、又他力教の方は阿彌陀佛の已に成就したまいし本願の不思議力を以て最終目的を達する因と立るかゆへに、藥力を以てする者と之を比するを得るか如し、併し人爲に比する自力教の中に又其趣を異にする者あり、下に於て云ふことあるへし、要するに佛教中の目的を達する方法を說明するに於て、人爲的の自力教と藥力的の他力教との二種ありと領知せられたし

偖て此より佛教に說く目的は總しては清淨にありと云ふことを得れども、其清淨に就て三種の別あることを知るへし即ち左に

一に自利清淨、　小乘敎所說の目的

二に利他清淨、　大乘敎中の一種の菩薩の目的

三に二利清淨、此の下に二種あり

一に超然清淨、　大乘聖道門自力敎所說の目的

二に同事清淨、　同淨土門他力敎所說の目的

此の超然と同事のことに就き一言せさる可らす、全體佛教には厭離穢土、欣求淨土、と云ふ厭欣說あり、之に依て或る者は佛教は厭世教には非さるかと疑ふ者あり、然れとも佛教の厭欣說は階級的策勵法にして彼の厭世を奬勵して社會を悲觀せしむる者と同日に論す可らす、其故は佛教の厭欣說は向上策勵の意味なれはなり、例へは一年級の學生か同級の首席にあるを以て得々たるを戒め一年級の首席に有るを以て得々として成す事の盡きたるか如く思ふへからす、層一層勉勵して二年級三年級の其上にあるを忘る可らすと戒飾するか如し、假令一年級の如き下級に甘んすへからすと云へはとて一年級を修むるに及はすと云ふ意味には非さるなり、去れは佛教の厭欣說は向上策勵の意にして厭世觀に陷らさる者なるを知るへし、然れとも其の誘導の方法に於て、穢土を無視して超然主義を取る者と、穢土の業務を其儘取て以て欣求淨土の勤めとする同事主義の者と有るなり、然れとも共に二利清淨の範圍内に有る㊀へ第

三の二利を開きて超然と同事とを分てるなり（超然は字の如く解し易きも同事とは如何なる意なりやと問ふ者あるべし、此の同事とは佛教中に菩薩の四攝法と云ふ事あり、一に布施攝、二に愛語攝、三に利行攝、四に同事攝なり法界次第に委し）

上來は小祢か見たる佛教中の目的說を總括して述へたる者にして未た佛教の證文を示さす、故に已下に於て佛教の文證を出し之に加ふる問答を設けて一編を結はんと欲するなり

第三章　證文を擧けて佛教の人生目的は淸淨說にあることを結す

本章に於ては佛教中に說ける人生の目的は淸淨なりと云ふ明文を擧けて之を諸君に紹介せんとす、然るに佛教の經典は汗牛充棟實に幾千卷なるやを知らす、故に小祢の如き讀書力の少なき者十分に枚擧する能はす、故に經典中最も高名なる者より論せん

一に涅槃經に說ける七佛通戒の偈なる者あり、卽ち釋迦佛のみならす過去世に於ける佛も皆是の如く說き給ひし經說なりと云ふを見るに左の如く言へり

諸惡莫作　衆善奉行　自淨吾意　是諸佛教

此の四句の文は白樂天と鳥窠禪師の問答によりて世に多く知られつゝあり、然れども多くは前二句を以て佛教の眞意の如く謬まられつゝあり、全體此偈の本旨は第三句にあり、其故は佛教に有ては身口意の三業の中に就て身口二業よりは意業を本として教を立つるを大乘教の奥意とす、然るに此の通戒偈の初の二句は身口二業に就て止作の行爲を示したる者なり、若し具さに之を說明せは第一句は消極的道德にして止事戒の方なり、又第二句は積極的道德にして作事戒の方なり、此の二は或る目的を達するに就ての手段行爲にして其外に目的の存するあるを知るへし、卽ち第三句の自淨吾意是れなり、故に若し吾意にして淨ならは諸惡を勸むるもの有るも作さず、衆善を去らしむるもの有るも去る能はさるに至らん去れは第三句は之を結果とし初め二句は其果に到達する因行として考ふれは思ひ半はに過きん、依て此の偈は淸淨を目的として教へるのか佛教てあると云ふ第一の證文となるなり

二に法華經に說ける一大事因緣に就ての開示悟入の文なり左に

諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。諸佛世尊。欲令衆生。開佛知見。使得清淨故。出現於世。欲示衆生佛之知見故出現於世。欲令衆生。悟佛知見故。出現於世。欲令衆生。入佛知見道故。出現於世。舍利弗。是爲諸佛唯以一大事因緣故。出現於世

此の經文を見るに一大事因緣とは衆生を開示悟入せしむることなり、開示悟入は何物に對して之を云ふかと問はゝ佛知見に開示悟入せしむるなりと云ふへし、其の佛知見とは何物なりやと云はゝ、最初の開の下に清淨と云ひ終りの入の下に道と云ふ此の初後の二を合して清淨道を指して佛知見と云ふ、去れは法華經の奥義は清淨道に開示悟入せしむるの外なしと云も過言に非さるを知るへし

已に斯の如く佛教は大宇宙に向て最後の目的を示

すにも、亦人生に限る部分的目的を論する場合にも其地位に適する迨の清淨を教へて目的と爲さしむる者なり、實に清淨は無私なり又無表裏なり、又無闇黑なり、故に部分に於ても全體に於ても之を目的とせは誤謬なき生活を得へし、故に佛教中には清淨を教ゆる文甚た多し、左に其の二三を列記すへし

大集經言。一切衆生の心性は本淨なり、煩惱の諸結染着すること能はす、猶し虛空の沾汚すへからさるか如し

寶積經言。心性の淨きこと、水中の月の如し

文殊師利問經言、心は本淨なり、諸過を垢と爲す智慧の水を以て心垢を洗除せよ

入楞伽經言。心濁亂を離るれは、我か心を說て佛と爲す

又言、衆生の心は涅槃なり本性常に淸淨にして異なきこと虛空の如し

四十二章經言　人鐵を鍛ひ滓を去りて器と成せは器卽ち精し、好く道を學ふ人、心の垢染を去れは行

即ち清淨なり

法句經言　慧人は淨くして廓然たり

占察經言　衆生の心體從本已來不生不滅にして自性清淨なり

又曰、彼心を如來藏と名く、所謂無量無邊不可思議無量の清淨の業を具足す

涅槃經言　涅槃とは解脫なり、「中略」眞の解脫は即ち是れ如來にして其性清淨なり、如來と解脫と二あることなし「乃至」眞の解脫は取るべからす眞の解脫は清淨なり」云云（佛教聖典四八五頁對照すべし）

瑜伽師地論言、諸佛菩薩は有情をして清淨ならしめんと欲するが故に種々の法を說くと云云

已上は其二三を擧くる者にして、此外大體に就て云はゝ佛教中に常に梵行を修すへしとか、又は梵音を聞くとか云へる語多し、此の梵と云ふは梵賀磨と云語の下畧にして此に譯すれは淨と成ると云ふ、去れは總て佛教中に出る梵とは清淨のことなりとして拜讀すれは佛教全體か清淨を教へるの外なきを知り

得らるゝなり卽ち涅槃經、及ひ金剛般若經、又は大智度論、大乘掌珍論、世親攝論等には菩薩の修する梵行を分て三輪清淨と云ひ又は三事清淨と云ふ其外清淨法身、清淨佛土、清淨智慧等の語を以て佛果の殊勝にして清淨なることを顯はす經論釋甚た多し、然れは佛教は、人に教ゆるに清淨を以てすると云ふこと疑ふへからさるなり

更に進て小衲等か信する他力教淨土門は一層直裁に清淨說を教ゆる者にして、卽ち罪惡の身を穢身と

し無常濁亂の世界を穢土とし、穢身穢土を出離して淨土淨身を指示教誨するを淨土門の本能とするを以て知るへし

尙淨土門に於ては清淨を說くこと究めて微細なるを覺ふ、卽ち曇鸞大師の淨土論註に(下卷二十四紙)淨入願心章ありて清淨句と云ふを釋し、又順菩提門と云ふ章には三清淨を示せり、一に無染清淨、二に安清淨三に樂清淨なり、斯の如く清淨を分解して今世後世の清淨行爲を教ゆるを我か淨土教とし、而して其教

ゐる所ろ卽ち人生の目的にして亦宇宙最終の目的と一致する者なり之を小衲は同事清淨と名くるなり

更に一言加へ置き度は清淨說と無我說の同異なり我か他力教淨土眞宗に於て清淨を說明するに無貪の意味を解することあり卽ち阿彌陀佛の十二光の中第六の清淨光は貪欲の煩惱を對治すと說か如き是なり而して無貪は無我を意味する者なれは清淨說と無我說とは姑く寬狹の別あるも其の搔を一にする者なり故に現今世人の多く云ふ所の自我實現とか大我說とか云ふもの卽ち私我を去りて公衆共通の大我を實現せんと務むるは、佛教に說く同事清淨の一部分たる無貪無我の觀念を增長せしむるに相似す

噫、偉なる哉、大聖の眞言去し三千載の昔にありて今猶生命ありて活躍す・我黨の同志者仰く可し信す可し

本論に於て既に佛教に說ける人生の目的は淸淨にありと論せり、然るに佛典を繙く時は無上大利と云ひ、又は眞實之利、又は二利圓滿と云ふ成語あるを見る、去れは利を以て目的とする意なるか如し如何

答云く、此等の成語は目的を達するに就て最も利益となる業因に名くる者にして利を以て目的とするの意味は佛教中になし

問云く、佛教中特に眞宗の如きは自已最終の所期を極樂と云ひ、又安養と云ひ　又快樂無極と云ふて衆機を誘導せり、然れは目的とする所は幸福快樂にあるか如し、如何か幸福快樂は目的に非すして淸淨を目的とすると云を得るや

答云く、快樂と云ひ極樂又は安養と云ふは淸淨と云ふ目的を達し得たる後の結果位にある感觸を云ふなり、之を目的とせよと云ふに非す、眞宗八世の知識慧燈大師は極樂はたのしむと聞て參らんと願ひの

そむ人は佛にならすと申されてあり（御一代記聞書第百二十三條）、去れは樂を目的として教を立てたるものに非さることを知るへし

問云く、佛を大自在者と云ひ、佛の力を自在神力と云ふ、此等の成語より考察を下す時は佛教は自在即ち自由を目的とするか如し、如何

答らく、佛は元より自在者なれとも其の自在か清淨てなくては佛教に説く自在の義とは成らす、他教即ち基督教に説く自由の如きは神の前には自由なし

其他に向て始めて自由ありとするは其一面に於て幾分かの闇黑を帶たる自由と云はさるを得す、清淨圓滿無碍の　在即ち眞正の自由と云ふを得す、佛教の自在は圓滿の自由なり、如何なる場合に於ても無碍なる自由なり、去れと此の自由を目的として得んと求むるも得へからす、即ち靈妙清淨を目的として其地位に達するを得は自ら清淨の自由を得、又清淨の繁榮も清淨の純結も期し得らるゝなり、上に擧けし涅槃經の文に眞の解脫は清淨なりと云ふ、此の解脫

とは繫縛を離れる自由の義なり、其の自由は清淨なりと佛已に判決したまへり故に佛教の極致は清淨の二字にあり、彼の東坡先生の詩に溪聲卽是廣長舌山色豈非清淨身と云ふも佛教所期の結果を清淨と見たる考へより吟せられたる者なるべし

上來陳へたる所は人生は如何にも清淨にありたしと云ことを佛教に據て申述へたるまてなり、未た充分に腹案も文章も具はらす、依て他日修正して諸君に更に御噺しするの榮を得んことを庶幾す先つ

明治四十一年十月二十五日印刷
同　年十一月一日發行

著作者　廣陵丁賢

京都市下京區中珠數屋町通烏丸東入廿人講町廿二番地
發行兼印刷者　西村七兵衛

不許複製

發行所　京都市東六條　法藏館
電話二三五八番
口座二五四一番

日本沙門 中尾祖應師 上島深玄師 謹修 ▲藏經新譯 佛陀の聖典 壹圓貳拾錢

文學博士南條文雄師監修 文學博士井上圓了師監修 ▲眞宗寶典 上製八拾錢 特製壹圓五十錢

文學博士南條文雄師監修 ▲親鸞聖人全書 上製八拾錢 特製壹圓五拾錢

文學博士南條文雄師監修 ▲蓮如上人全書 上製八拾錢 特製壹圓五拾錢

文學博士村上專精師監修 ▲佛教百科寶典 壹圓

文書傳道會監修 ▲新式 眞宗假名聖典 上製壹圓九拾錢 特製壹圓貳拾錢

法藏館編輯局編輯 ▲新式 眞宗聖典 上製八拾錢 特製壹圓貳拾錢

法藏館編輯局編輯 ▲袖珍 眞宗聖典 上製六拾錢 特製八拾錢

田淵靜緣師立案 ▲布教資料全集 壹圓

田淵靜緣師立案 ▲例祭各宗 布教大寶林 壹圓參拾錢

發行所 京都市東六條 電話二二五八番 口座二五四一番 法藏館

清澤滿之師著 ▲宗教哲學骸骨 定價拾五錢

河崎顯了師著 ▲家庭說教 定價參拾錢

河崎顯了師著 ▲續家庭說教 定價參拾錢

河崎顯了師著 ▲勅釋 百喩經 定價拾六錢

大須賀秀道師著 ▲信仰講話 定價貳拾五錢

大須賀秀道師著 ▲信仰聖訓 定價八錢

和田龍造師著 ▲人生問題 定價貳拾五錢

和田龍造師著 ▲宗教管見 定價貳拾五錢

和田龍造師著 ▲佛教信者の喜び 定價拾錢

和田龍造師著 ▲淨土三經交際論 定價五拾錢

和田龍造師著 ▲阿彌陀經達意 定價參拾錢

今井清吉師著 ▲眞宗大綱 定價參拾錢

發行所 京都市東六條 電話二二五八番 口座二五四一番 法藏館

今井昇道師著▲他力安心示談　定價九拾錢
曉烏敏師著▲心靈夜話　定價貳拾錢
曉烏敏師著▲宗教清話　定價拾五錢
藤谷還由師著▲極樂世界觀　定價貳拾五錢
藤谷還由師著▲靈魂彌陀地獄有無觀　定價拾貳錢
安藤州一師著▲安慰錄　定價貳拾五錢
文書傳道會編▲妙好人百話　定價貳拾貳錢
館登編▲義順嗣講百話　定價拾貳錢
小倉了誠師著▲信仰のすゝめ　定價拾貳錢
家庭社▲佛教の家庭　定價貳拾五錢
二十大家合著▲眞大師　定價貳拾錢
福井了雄師輯▲親鸞聖人　定價四拾錢

發行所　京都市東六條口座二五四一番　電話三三五八番　法藏館

94
591

010606-000-7

94-591

人生の目的

広陵　了賢／述

M41

AAE-2080